早期英語教育の必要性

00E078　津 野 雅 之

Ⅰ．序論

「日本人は英語を話せない」いつからその言葉が当たり前になってしまったのであろう。「経済大国日本」と呼ばれる割には先進国の中で日本は飛び抜けて英語の普及率、使用率が低い。日本人の大部分が母語である日本語のみの話者である。そんな日本に文部科学省は一石を投じた。それが「英語の使える日本人の育成計画」(1)である。日本にも「英語」という「教科」がある。その中で英語を使えるようにしようというものである。

2002年４月から全国の公立小学校で新しい学習指導要領(2)のもとで授業が展開されている。その中で「総合的な学習の時間」(3)があり、国際理解教育の一環で英語が導入できるようになった。それによりそれ以後の英語教育がどのように変わっていくかはまだ試行錯誤段階だが、小学校で英語を導入することによりどのような意義があり、小学校に限らずそれ以前の年齢からも早期英語教育をすることがどのような影響を日本に及ぼすのであろうか。

１．何故この「早期英語教育」をクローズアップしたのか？

自分自身が中学生で英語を習い始めたときもそうだったが、「異国の言語を学ぶ」というよりは「中学校の勉強，５教科のひとつ」という捉え方で、高校入試のために勉強しているといったもので、「外国人としゃべることができたらいいな」または「洋楽を少しでもわかりたい」という思いは全くなく、コミュニケーションの道具としての捉え方は皆無であった。高校に行くとさらに学習に対する意欲は激減し、突如として「英語」は教科書を暗記すればよい単純な暗記教科に変化した。大学に進学すると私は自分の英語力のなさに驚いた。外国人の先生の言っている事がわからない。簡単なことが英語で表現できない。今まで英語をコミュニケーションの道具として捉えていなかった私にとってカルチャーショックを味わった気分だった。

では、何故この早期英語教育に興味を持ったかというと、中学校を英語の入門期とすると「教科」としての英語観が強すぎて、「言語」としての英語観が失われてしまうと考えたからだ。そもそも「言語」というのは知らず知らずと身に付く、つまり「習得」するものであり、テストのために勉強をして「記憶する」ものではないのではなかろうか。大切なことは「ガク習(楽習)」することではないか。異文化や他言語を学ぶ「学習」そして素直にそれが、「異文化や他言語を学習することは楽しい」というように生徒が英語を楽しく学ぶこと。すなわち「楽習」(4)でもあるような授業こそが英語の授業の本質であると私は考える。

２．この論文の展望

１で述べたとおり言語としての英語観を持つための早期英語教育という観点からアプローチしていきたい。まず、この次のⅡでは、「現在の英語教育の現状」とテーマを設け、文部科学省の施策である「英語の使える日本人の育成計画」を説明し、実際に、その政策下で小学校英語

教育には何が求められているのかも説明したい。また、現在の日本での英語という言語を学習する際の環境を説明し、問題点を考えていく。Ⅲでは、早期英語教育は必要か否か、言語習得理論、現在の子供、大人の英語観を調査したアンケートをもとに述べていきたい。Ⅳでは、「早期英語教育方法論」というテーマに基き、アンケートの結果やそれまでの展開を考慮した上で、どういった指導内容や方法がよいか理論的にも実践的にも考えてみたいと思う。そして、結論付けのⅤでは早期英語教育は必要だという答えを導き出し、実現のためにどうしていったらよいか考えていきたい。

Ⅱ．日本の英語教育の現状

１．小・中学校での文部科学省の施策

（1）「英語が使える日本人の育成計画」

近年、日本の英語教育の改善は目覚しく、着実に文法・訳読中心の授業からコミュニケーション中心の授業に移行している。平成14年度施行の新カリキュラムによりＡＬＴの活用や、習熟度別、小人数教育などがさまざまな教育現場で実施されている。そこで、文部科学省はさらに抜本的な改革を促進するため一つの方針を考案した。「英語が使える日本人の育成のための行動計画」である。その背景には、経済・社会面においてグローバル化が進み国際的な依存関係が深まっている今日では、英語は母語の異なる人々をつなぐ国際共通語となっており、日本人は英語をうまく扱えないことにより制限を受けていることが考えられる。そこで、国際共用語としての英語のコミュニケーション能力を身につけることがこの行動計画の目的とされている。

では、日本人にどれほどの英語力が求められるかというと、この方針では「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」としている。具体的には、中学校卒業段階で挨拶や応対、身近な暮らしにかかわる話題について平易なコミュニケーションができる（卒業者の平均が英検３級程度）、高卒段階では日常的な話題について通常のコミュニケーションができる（卒業者の平均が英検準２～２級程度）としていて、大卒の段階では仕事で英語を使える程度にしようというものだ。さらに、英語教育を改善するためのアクションとしては「英語を使用する活動を積み重ねながらコミュニケーション能力の育成を図る」ことを目標としている。

コミュニケーションの手段として使用する活動を積み重ね、これを通じて語彙や文法などの習熟を図り、「読む」「書く」「聞く」「話す」のコミュニケーション能力の育成を図っていく指導の工夫を必要とし、そのためには英語の授業において習熟度別、小人数指導などを積極的に取り入れ、ＡＬＴや英語に堪能な地域人材を積極的に登用し、授業の質を上げることが求められている。そして、その方針では、さらに英語で表現するための国語力の向上と英語の授業を各学校段階で一貫して行う必要性を述べている。

（2）小学校での英語活動の位置付け

では、小学校では何が求められているのだろう。その前に注意すべきことは、よく「小学校にも英語教育が今行われている」というが、小学校の「英語」は教科としてではなく、あくまでも国際理解教育の一環として取り上げることが可能になったというだけであって、まだすべての公立小学校で英語学習が取り入れられているわけではないという点である。しかし、「英語

が使える日本人の育成のための行動計画」によると、目標として「総合的な学習の時間」などにおいて英会話活動を行っている小学校について、「その実施回数の３分の１程度は、外国人教員、英語に堪能な者又は中学校等の英語教員による指導を行うことが望ましい」としており、よりいっそう小学生年代からの英語導入を図ろうとしている。ただ、中学校の前倒し段階としてではなく、あるいは、教師が一方的に教え込むのではなく、児童が楽しみながら外国語に触れたり異文化に慣れ親しんだりできるようにするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習活動を行い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を育成することが大事と述べている。

「小学校英語活動実践の手引」(5)によると、国際理解教育では、英語活動、国際交流活動、調べ学習の３つを柱に子どもたちに国際感覚を身につけさせていこうというのである。「英語活動」では、活動そのものが異文化に触れるよい機会になる。「国際交流活動」では、子供たちはさまざまな学校行事を通じて他文化に触れたり地域の外国人住民や留学生と交流を図り、「調べ学習」では子供が興味や関心を抱いたことを自らの力で深めていけるようにしようというのである。したがって、小学校の英語教育を考える場合、検定教科書がない現段階では、文部科学省の掲げる国際理解教育の理念を踏まえ、小学生だからこそできるということをうまく利用した指導計画を立てなければならない。その反面、小学校で英語活動に対するカリキュラムがないという事は、ある一つの枠組みにとらわれることなく、生徒の反応を見ながら、その学級に則したペースで、好きな内容を取り上げる事ができるというメリットもある。

小学校の英語の位置付けは、教科としての英語ではなく、「総合的な学習の時間」で扱う国際理解、情報、環境、福祉･健康の中の選択の一部として「外国語会話等」という形で英語を取り上げる可能性ができたに過ぎない。国レベルの学年別、あるいは小学校終了時の具体的な英語の達成目標は設定されていない。それ故に、子供が通った小学校によって英語の学習内容があまりにも違ったり、あるいは、英語を取り上げない小学校もあったり、英語の体系的学習が求められる中学校英語教育のスタートラインからレベル差が生じる事もあり得る。プラスになるべき小学校英語導入がマイナス要素となっては意味がない。学習者が「英語好き」あるいは「英語嫌い」になるのは、学習初期段階に受ける印象が大きな影響を与えるのは言うまでもないだろう。どの小学校でも、子供たちが英語や異文化について触れる事で「英語好き」になり、更なる英語学習への意欲と興味が湧いてくるような指導計画を立てる必要がある。

２．日本の言語環境

英語はいまや世界の共用語となりつつある。日本で話されている言語を考えていただきたい。日本では英語を使う場面はどんな時だろうか。学校の授業、英会話学校……。いずれにせよ使われる場面が少ないのは明確だ。一方で、東南アジアのフィリピンでは英語は第２言語である。学校の授業や公式な会議では英語を使う。過去に植民地であった背景があるにせよ、生活の一部分に英語が存在している。前者の例のように英語が外国語として存在している言語環境をＥＦＬ（English as a Foreign Language）といい、日本や韓国など主に東アジアに見られる。後者の例のように英語が生活の一部分として存在している言語環境をＥＳＬ（English as a Second Language）といい、ここでは英語が第２言語として公用されている。英語を母国語としない人が英語が第１言語の国へ住んだりすることもＥＳＬの環境下にあるという。

それでは、ＥＦＬとＥＳＬの環境では英語を学ぶ過程においてどのような違いがあるのだろ

う。ＥＦＬとＥＳＬの顕著な違いの１つは、英語環境にさらされる量にある。ＥＳＬの環境下では生活の一場面に英語が存在し、必然的に英語を目にしたり聞いたりし、コミュニケーション手段として用いなければならない。しかし、ＥＦＬの環境下では英語を活用できなくても何の困難があるわけでもなく、学習者が積極的に学ぼうとしない限り英語をコミュニケーションの手段として扱う事はＥＳＬの環境に比べるとはるかに少ない。日本はＥＦＬの環境下にあり、教科としての英語は存在するが、英語を使えなくても日本にいる分には何の困難もなく、結果的に英語を学習するモチベーションを下げている。このような状況下で英語を使えるようになるには、かなりの努力を必要とする。こういった環境的側面も言語習得に影響を与える事を知っておかなければならない。

Ⅲ．早期英語教育の必要理論と不必要理論

１．人々の早期英語教育観

実際に現在の人々は早期英語教育の導入をどう感じているのか知るため、アンケートで調査してみた。人数は約100人で、対象は中学生、大学生、社会人から英語教師などさまざまな年齢層から探ってみた。アンケートは全部で５題。幅広い意見を求めるため、５題中３題は記述式とした。アンケートの内容は以下の通り。

英語教育についてのアンケート　　年齢　　性別　　職業

英語教育のアンケートについてご協力お願いします。

１．あなたは学生時代（現在）、学校での英語の授業を楽しく受けていました（ます）か？
　YES　or　NO

２．YESと答えた人は楽しかった（ない）という理由を、NOと答えた人はそうでなかった（ない）理由をできるだけ具体的に記入してください。

３．あなたにとって学生時代（現在）学んでいた（いる）英語とはどのような存在でした（です）か？　できるだけ具体的に記入してください。

４．今、小学校でも「総合的な学習の時間」で英語の授業が行われていますが、小学生のときから英語を学んでいたらあなたの英語に対するイメージは変わっていたと思いますか？
　YES　or　NO

５．小さいころからの英語教育は必要だと思いますか？理由もつけてできるだけ具体的に記入してください。

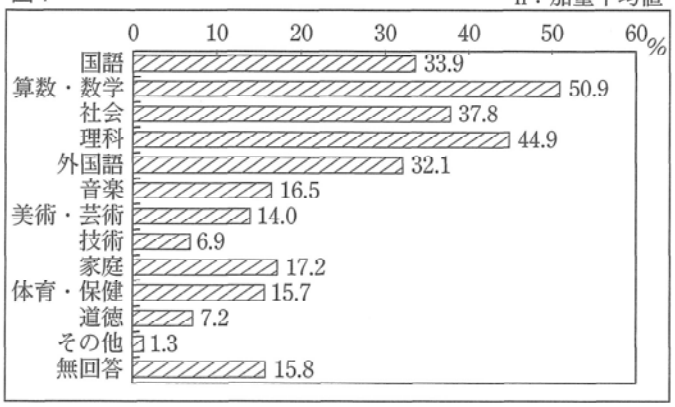
ご協力ありがとうございました

このアンケート結果の分析については、本論文のそれぞれに該当するセクションで詳細に説明していくこととする。

２．早期英語教育不必要論

「小学校で英語を導入すると日本人の英語嫌いがますます加速されるのではないか」「小学生段階で英語を導入すると日本人の語感が狂わされ日本が崩壊する」といった意見がいくつか見

図1　　n：加重平均値



られた。また「文法を学ぶことこそ日本人にあった学習方法だ」(6)という思想が根強く残っている。実際、多くの塾や家庭教師はとにかく文法規則を教える教授法で成り立っている。このセクションではこのような考え方に対する反論を試みたい。

「小学校で英語を導入すると日本人の英語嫌いがますます促進されるのではないか」という意見については、前章で「学習初期に及ぼす影響は大きい」と述べたように、単なる中学校英語の前倒しにならないためにも、小学校の英語教員の養成をするにしても、明確な役割の設定と小学校英語の「学習」、言い換えれば「楽習」に対するTeacher Trainingが必要なのは認めざるを得ないだろう。しかしながら、このような意見に対しては次の2つのことが言えるのではないだろうか。

1つは、あえて「教科」として英語を捉えるのであれば、それはどの教科にでも言えることであり、何も英語に限ったことではないのではないか。例えば、あるアンケートで算数・数学が「苦手な教科」の1位に挙がった（図1参照）。その算数・数学を中学を導入期とするとどうだろう。それは極論としても、学習者の大部分が算数嫌いになる原因の1つでもある分数を中学校で導入するとどうなるだろう。確実に日本人の数学離れが進行してしまう。「英語は日本では必要度が低いから」という意見を中学導入の理由にしたとしても、前章で述べたとおり、国のボーダレス化が進む現代で英語を使えるようになる必要性は確実に増してきている。

確かに、日本の教育は知的レベルに合わせ、段階的に学んでいけるシステムになっている。しかし、「英語」は中学校を入門期とするほど難しい教科だろうか。知ってのとおり、1番最初に習うのはアルファベットである。それはいわゆる、「文字の発音と書き方」のレベルであり、中学1年で学習するに最適とするにはあまりにも遅すぎる感は否めないだろう。事実、「中学1年の英語は簡単。2年生以降が難しい」という言葉をよく聞く。それは実際、中学1年生で習う学習事項はその年代にとってはあまりにも容易という裏付けであり、2年生でまだ英語の「いろは」しか知らない状態で、つまり、十分に英語に触れていない状態で文法として概念化され、いきなり高度な文法知識を求められる「能動的暗記学習」へと変化してしまっていることを示している。

総括すると、単に中学校英語への前倒し段階ではなく、広い視野を持ち、小学生時代にしか会得できないスキルに目を向けつつ英語を導入していったらどうだろうということだ。小学生時代にしか会得できないスキルについては次項で触れることにする。

もう１つは、この「小学校で英語を導入すると日本人の英語嫌いがますます加速されるのではないか」という反対論は、「英語＝教科・学習」という捉え方に基づいているように思われる。「言語」としての英語は、学習者が興味を持ち、その興味を満たすように、例えるなら、赤ちゃんが言葉をしゃべろうとするのを手助けするように活動を組み立てていくのが前提である。もちろん、小学校英語導入の際には、文法という概念化の道具はまだ要らない。うまく話せない子がいたとしても、英語を聞くことにより後に話せるようになるだろう。そういう英語の入門期なのだ。もちろん教師の力量が問われる。つまり、たくさん児童に英語に触れさせるための教室内英語運用能力もさることながら、そういった教授法を理解していないと子供たちにとって効果的な英語導入にならないのは事実だ。

さらに、「小学生段階で英語を導入すると日本人の語感が狂わされ日本が崩壊する」(7)といった反対論について論じたい。まず疑問に思うのは、24時間日本にいて、日本語に浸っている状態で、外国語である英語が母国語である日本語を超えて母国語習得の障害になることがあるのだろうか。まず有り得ない(8)。逆にこのような結果、英語の普及率が日本で上がったとしよう。それは、喜ばしいことなのではないか。実際にデンマークでは、デンマーク語が日本語同様、デンマーク人のみが話す母国語であるが、第一外国語として英語がある。もちろん母国語のデンマーク語は英語の派生語ではなく、類似性も薄い。だが、デンマークに観光に行く外国人が英語を話しても、ごく普通にどこでも通じてしまう。それくらいデンマークでは英語の普及率は高い。

個を確立するために母国語できちんと考える教育をしなければならないのは事実だが、外国語が普及すれば自分たちの母国語が侵されるという被害妄想は、日本がいかに島国根性であるかの発露であり、何人だから何語、といっているうちに日本は世界から取り残されていく。加えて、この反対論にも、機能的言語思想が強く、「英語＝文法」が根強く残っていて、本当の小学校英語導入の目的を理解していない。単なる、「中学校英語の前倒し」と誤解してしまっている。

３．言語習得理論

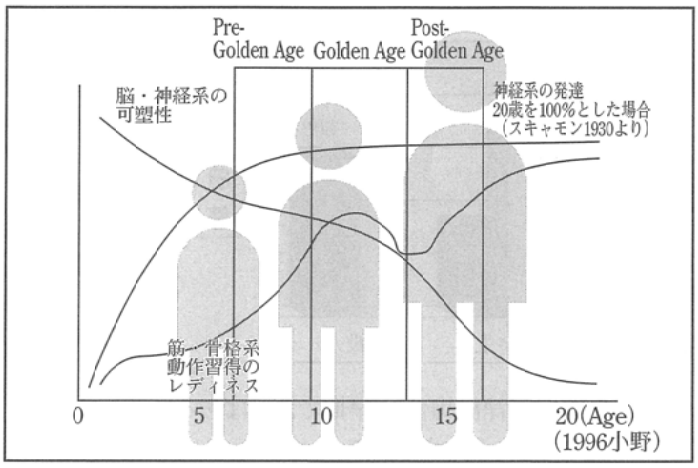
「言語には自然と習得できる年齢がある」、「小さいころの経験は大人になっても忘れない」といったことが賛成派のアンケートの答えにあった。果たして、それは理論的な裏付けができるのだろうか。ここでは、その裏付けを試みると同時に、前項で触れた「小学生時代にしか会得できないスキル」についても説明する。それぞれ、神経面、環境面、心情面に分けて分析したいと思う。

（１）神経面

「小さいころの経験は大人になっても忘れない」という意見にはどんな裏付けができるのか。まずは図２のScamon(1930)の発育曲線の「神経系の発達」を見てもらいたい。10歳までは神経系の機能が急速に発達し、13歳を迎える頃すなわち中学１年生頃には完全にその成長は終わってしまう。つまり、小学生時代はひとつの動作によって、ひとつの神経回路が形成されるという、神経回路の配線が促進している一生に１度しか現れない時期ということを頭に入れてもらいたい。また同時にその時期になると８歳を境に視覚記憶が聴覚記憶を上回る。

そして、Krashen, Long＆ Scarcella(1979)は、「大人は習得は早いが、若いほどより効果的に

図2

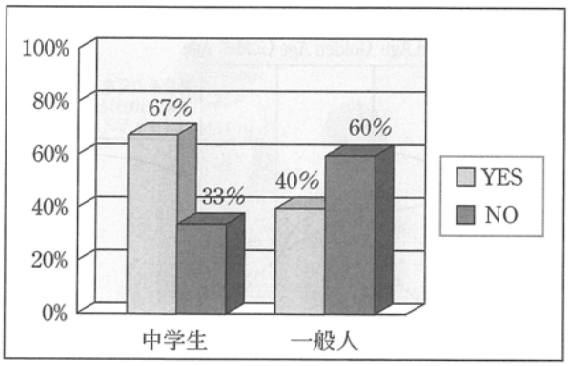


習得する」として、子供の言語習得の優位性を主張している。脳の機能についても年齢が大きく起因している。Larsen-freeman & Long(1991)は、左脳と右脳の機能を次のように述べている。左脳は論理的で分析能力を左右し、どちらかというと直線的処理系を取り、複雑な構造を順序だて、分析する機能を備えている。それに対し右脳は空間把握、視覚、臭覚、聴覚を使ってイメージを作り、同時性を重んじる機能を備え全体像を捉えようとする総合的処理型をとるとしている。その脳の機能は、Penfield&Roberts(1959)によると、乳児期から思春期にいたるまでは脳は比較的、順応性を持つが、それを過ぎると脳の機能は左脳と右脳に分化するという。思春期を迎えるころにはそれぞれ特別な機能を持つようになり、言語機能が左脳に偏るという、「脳の側性化」を唱えた。そして、Curtain & Pesola(1994)は、言語機能が左脳に偏らないうちに右脳を刺激する手法で、例えば、スキット、ロールプレイ、歌、ゲームなどの使用が言語習得に役立つとしている。まとめると、左脳に脳の機能が偏らないうちに、右脳を使った手法で言語習得したほうがよいということだ。このように、生まれてから思春期にいたるまでのおよそ10年間ほどの言語習得時期をLennberg(1976)は言語習得の「臨界期」と称し、臨界期仮説(Critical Period Hypothesis)を唱えた。脳の側性化や臨界期仮説が、早期英語教育を大きく後押ししているのは事実で、脳の言語機能に偏りが生じる前に第二言語を習得するメリットは大きい。

（2）心情面

子供たちの言語学習を有意義なものにするためには、子供の言語学習に対する意欲や態度が言語習得に与える影響も理解しておく必要がある。Guiora（1972）らによれば、第二言語学習においては学習者個人のアイデンティティーと学習者の母語が密接に関係しておりそれを「言語的自我」[9]と称するという。思春期までの子供は、順応性をもち、新しい言語や文化に対し、恐れや間違いを恐れず容易に対応しようとするのに対し、思春期になると身体面、感情面、認知面が変化し、異国文化に対し防衛的になり、母国文化にアイデンティティーを持ち始めるとも述べられている。それを裏付ける学説として、Piaget(1966)の「9歳の壁」がある。「9歳の壁」によれば、母語の能力は4～5歳で完成する。そして、9歳までには音声を聞き分ける能力が完成してしまう。日本語の母音の数は5つであるのに対して、英語のそれは14（ないしは

図３　設問１に対するYES・NOの割合



15）である。したがって、英語習得開始期が早期であればあるほど、日本語・英語両方を話す能力が自然に開花しやすいといえる。また、Piagetは、小さい時期から外国語教育を開始すると異文化に対する偏見を持たなくなるとも主張している。これも９歳前までが理想で、それまでに外国語に触れないと異文化に対する偏見を持ってしまうということである。

このような「言語習得適齢期」的側面と「異文化順応適齢期」的側面から見た９歳までの重要性のことを「９歳の壁」という。９歳以降に外国語教育をスタートすると、どうしてもこの壁に当たってしまう。９歳までに異なる言語や文化に触れることは、単に言葉の問題にとどまらず、ものの見方、考え方を豊かにするという点で非常に重要なものである。異文化に触れることで、どちらの文化が良いとか悪いとかではなく、それらに「違い」があることを認め、相手のことを思いやる心が育つことが、教育的に考えるなら早期英語教育の最大の効用であるといってもいいだろう。 また、Curtain＆Pesola(1994)によれば、８歳から10歳の時期の子供たちは情緒面で壁を作らず様々なことに挑戦し体験しようとする特徴を持っている、とされている。外国語を話したり、理解しようと挑戦して間違いを恐れなかった幼い子供のころと違い、大人になるにつれ受動的になる傾向があるようだ。積極的に学ぶ姿勢があり、アイデンティティーの問題や、不安や恐れがないのはこの時期なのだろう。

（３）環境面

最後に環境面からアプローチしたい。Ⅱの（２）で述べたとおり、日本はＥＦＬの言語環境化にある。しかし、逆に捉えれば、そのような環境下でいかに自然な状態で効果的に英語を学べるかという環境設定が重要になってくる。実施したアンケートの中に、こんな興味深い意見があった。「勉強としての英語ではなく、楽しく身に付ける英語を学べるのは現在の日本では小学生です」。つまり、中学生になってしまうと、今の日本では過酷な高校受験が待っていて、学ぶことの楽しさから、受験のための勉強へと変化してしまう。事実、実施したアンケートでは、中学生の約８割が設問５の「あなたにとって今学んでいる英語とはどのような存在ですか？」という問いに対し、「覚えなきゃいけない存在」、「高校受験のための勉強」、「苦手な教科」、「教科の１つ」と否定的な英語観を持っており、また、「将来何かの役に立つかもしれないから勉強している」という意見も多く、はっきりとした目的意識や言語観を持っている生徒は全体の約１割だった。驚くべきことに受験の影響が比較的少ない１年生でも、約１割程度の生徒しか言語としての英語観を持っていない。そのような生徒たちにしっかりとした言語観を持ってもら

うにはやはり、小学生年代からの導入が必要ではないか。最後に中学校と小学校の比較として久埜（2003）はこう提言している。

「**導入に際しては、学習環境の整備は各学校や地方教育委員会に任されており、全国共通の指導目標もカリキュラムも明確にされていないので、小学校英語活動の実態を把握することは難しい。だが、年間1回であろうと、週当たり1回であろうと、子供たちは嬉々として活動に参加し、学校全体の雰囲気も明るく変わって来たという報告がよせられている。この小学校英語活動を中学校の英語学習と較べるには同じ入門期の“英語”とはいえ、年齢だけでなく学習環境も考慮した上で、学習内容や指導方法を検討しなければならない。**」(10)

図4　設問2におけるNOの理由の内訳

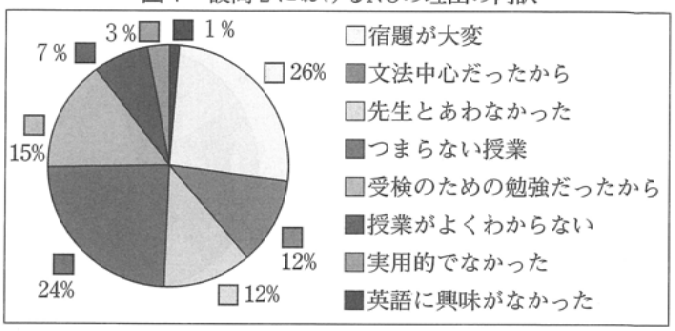
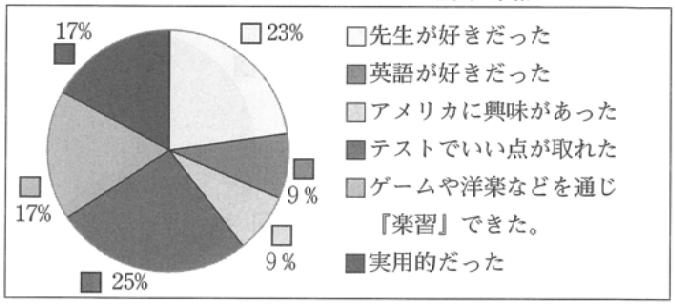


図5　設問2におけるYESの理由の内訳



Ⅳ．早期英語教育方法論

それでは実際に、早期英語教育ではどのような学習内容が適していて、どのような指導方針にしていったらよいのかについて検討する。その前に、今まで深くは触れていなかったアンケートの結果や参考図書から導き出される問題点を挙げた後述べていきたい。

1．現在の日本の英語教育の問題点

まずは、まだ触れていないアンケートの結果を述べていきたい。まずは設問1の、「あなたは現在（学生時代）、学校での英語の授業を楽しく受けていますか（いましたか）？」という質問に対し、中学生のアンケートをとった30人のうち、20人がYES、10人がNOと答え、一般人では70人中28人がYESと答え、42人がNOと答えた（図3参照）。総評するとNOが少し多いということになるが、問題は設問2の、YESと答えた人の理由とNOと答えた人の理由である。NOと答えた人の理由は、「文法訳読中心の授業だったから」、「受験のための勉強だったから」というのが主な理由だった（図4参照）のに対し、YESと答えた人の理由は、教師の影響や英語そのものに対するモチベーションに対するパーセンテージは高いものの、ただ単に「得意だったから」や「得意だから」という理由が全体の約25%だった（図5参照）。「得意だから好き」という答えは、言い換えれば、テストの点数さえよく、成績さえよければ好きということであろう。これは外国語習得の中心的目標である、「コミュニケーションを図れることの楽しみ」からは少し離れている気がする。

次に、設問4の小学校の総合学習の時間での英語導入についての必要性を問う設問では、約90%の人々が必要と答え、約10%の人々が不必要と答えた。設問5ではその理由を聞くのだが、設問4で必要と答えた人は、国際化社会の中で英語は必要という理由や、小さいころから始めるアドバンテージを考慮した理由が大半を占め（図6参照）、不必要と答えた人は前に述べたとおり、日本語のアイデンティティーによる問題や、子供たちの英語嫌いになる原因を考慮しての意見だった（図7参照）。

図6　設問5における早期英語教育必要理由

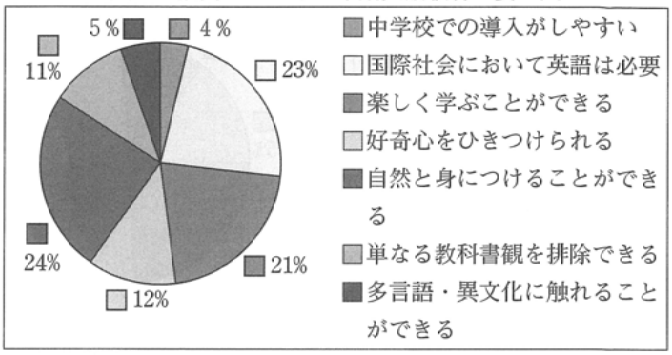
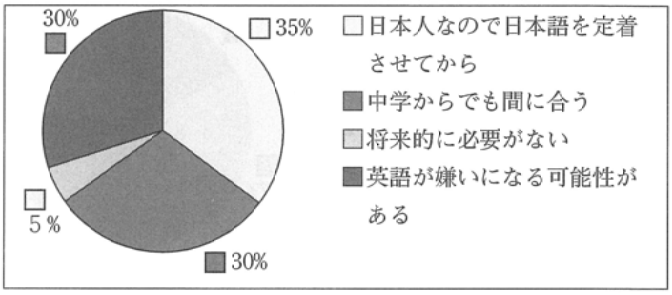


図7　設問5における早期英語教育不必要理由



このような結果からも、現在の日本の英語教育の問題点が明らかにされている。1つは、日本の英語教育環境についてである。中学校を導入期とするとやはり子供たちを学びから遠ざけてしまう「受験」という壁が待っていて、それを取り払うことは難しい。佐藤学（1999）はその高校入試についてこう提言している。「**高校入試の制度は、子供たちの不安を助長し、学びの意欲や快楽をそぎ落とし、大人社会への不信感を醸成し、自らを無力感と窒息感へと追い込む作用を強めている。大変な社会的損失である。高校入試の最大の問題は、子供たちが早々と将来の可能性を放棄してしまう点にある。序列の低い高校に進学することが、将来のすべてを決定してしまう閉塞感が、子供たちの未来を閉ざしてしまうのである。**」[11]。受験という制度に抜本的改革がなされない以上、しっかりとした英語の言語観をもち、楽しく学んでいくには、やはり受験の影響が少ない小学生時代を導入期とするしかない。

もう1つは教授法に関する問題である。言語というのは体験を通じ学んでいくものである。しかし、アンケートの結果では依然として教師が生徒に一方的に教え込んだり、文法規則だけを日本語で延々と教え込んで、英文を訳読する授業をしている風潮が残っている。それでは、生徒にとってただ単にパターン練習をするだけで何の新鮮さもない授業で、なおかつ集中力のある子や英語学習に対するモチベーションが高い生徒だけのみ参加する授業で有意義な英語学習とはいえない。それにより、中学高校で6年間英語を学んでもネイティブスピーカーとコミュニケーションが取れないという状況に陥ってしまう。

Jane Willis(2003)は、導入期の英語授業の進め方についてこう提言している。「**子供たちは生まれながらにして言語習得能力を備えている。ただし、この言語習得能力は実際に使われている言語を体験しなければ発揮されない。子供の注意力をひきつけ、かつ、意味に焦点が当てられている状況で、よく聞きよく理解しようと努力しなければ言語習得は起こらないのである。英語をたくさん聞かなければ英語の使い方を習得することはできないであろう。子供たちは実**

際に注意して聞いて理解したことだけを習得するのでたくさん聞かせることによりそれだけ早く理解力が発達する。」[12]また、文法学習への提言としてはこんな興味深いものがある。Lightbown, Spenda(1999)の調査によると、子供たちの英語体験が文型学習と単語学習に限られた場合、英語を習得することはありえないであろうという結果が出ている。つまり、コミュニケーションを図るための、英語のproduction skillの成長は文型学習や単語学習だけでは得られないということが言える。そして、Jane Willis(2003)は、こう付け加えている。「**完璧な文で生徒に問いかける必要はない。私たちは普段の会話で、完璧な文を話すことはなく、意味を伝える語句のまとまりを使って話している。文法ミスをすることを恐れないで。子供たちはミスに気が付かないものである。なぜなら、子供たちは先生が伝えたい意味を聞き取ろうとするからである。**」[13]つまり、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成のためにも、教師が生きた英語を子供たちに十分に提供する必要がある。

訳読中心で普遍的な授業に対する提言としては、Gregory Strong(2003)はHoward Gardnerの"Multiple Intelligences"を引用し、こう述べている。「**1983年彼は *Multiple Intelligence* という著書を出版した。その著書の中で彼は７つの異なる能力が人間にはあることを推進した。"linguistic", "logical-mathematical", "bodily-kinesthetic", "spatial", "musical", "interpersonal", "intrapersonal"という分野である**[14]。**1994年の更なる調査では、それに加え、"Naturalistic" という能力が追加された。Gardnerは、すべての人々はみんな異なったこれらの能力をすべて持っているという。その中で1番使用頻度の高い、つまりrecognitionの際に1番多く用いられる能力も人により違う。ということを発見した。**」[15]Gardner自身はこう提言している。「**教師は、言語学習に対したった１つの方法しか用いない。それでは、子どもたち一人一人がもつMultiple intelligenceに対応しておらず、きっと言語習得に支障をきたす生徒もいるだろう。なぜすべての生徒が同じ方法で学習すべきなのか。**」[16]

１人１人認知分野が違うならば、１つのintelligenceのみ用いる方法をとるのではなく、さまざまなintelligencesに対応した方法を考え、提供していくべきである。

またGardnerは、学習者にはそれぞれの学習スタイル（learning style)というものがあり、「どの学習者も３つの学習スタイルを併せ持っていて、必ず学習者は１つ得意分野を持っている。教師は場面によって最適なスタイルとなるような環境を作ることが大事」としている。３つの学習スタイルは下記を参照。

知覚的な学習スタイル(learning styles) visual learners：視覚を通して学習することが最も効率が良い。 auditory learners：聴覚を通して学習することが最も効率が良い。 kinesthetic learners：身体的活動を通して学習することが最も効率が良い。

教師はLearning styleに対応するような活動を展開する必要がある。

２．早期英語教育指導概要

それでは、今まで早期の英語教育におけるアドバンテージを述べてきたが、実際に言語習得理論などをふまえて、小学生の各学年でどのようなことを導入していったらよいのだろうか。

低学年と高学年に分け、活動例を取り入れながら述べていくこととする。

（1）低学年（1～3年生）の指導

低学年でのアドバンテージとしては、前述したとおり、視覚記憶が聴覚記憶をまだ上回っておらず、「9歳の壁」にまだ出会う前である。よって、英語という言語にたくさん浸らせることにより、文字からではなく自然と耳から英語を取り入れ、まだ「言語的自我」が芽生えていないのでそれを上手に模倣するだろう。やはりこの時期は自然な英語に触れる（exposure）ことが必要であり、英語が科目ではなく、生きた言語であることを実感させることが必要である。ただし、子どもの集中力持続時間は極端に短く、1つの活動に対する注意力持続時間は最長でも10分程度だろう[17]。

・Storytelling

Storytellingとは、英語圏や日本の昔話など（もちろん英語）を教師が生徒に英語で読み聞かせる手法である。子どもたちが絵本を一人読みするようになる過程を考えてみよう。子どもたちは幼いときお父さんやお母さんのひざの上で寝る前に飽きずに何度も何度も読んでもらうであろう。大人がすっかり飽きてしまったころ、子どもが本を自分で開いてなにやらぶつぶつ呟いている場面を見かけたことがあるであろう。本人はすっかり自分で読んでいるつもりでもよく聞くとお父さんやお母さんが読んであげた口調そっくりである。でもちゃんとページを繰っていて、そのうち子供は自分の読んでいる音とページ上の文字が対応していることに気が付くであろう。そうなるとおもしろくていろいろな本を開いて知っている文字を拾い読みし始める。これが一人読みの始まりである[18]。つまりreadingへのプロセスであり、storytellingはそれを助ける。

"The Three Little Pigs"（三匹の子ぶた）[19]

T：OK, it's the story time. Come up here and make a circle. No talking!
　Today, The name of this story is "The Three Little Pigs."
S：The Three Little Pigs.
T：Right, How many pigs are there in this house?（表紙を見せながら）1, 2,..(ぶたを指差しながら)
S：Three!
T：Yes! Once upon a time, there were three little pigs. The first little pig built a house out of straw. The second little pig built a house out of wood. The third little pig built a house out of bricks. Show me the (first second third) little pig.
S：(生徒は指差す)
(以下略)

という風にただ読み聞かせるだけでなくページごとにinteractionを入れながらすすめていく。

・Songs & Chants

英語の童謡やチャンツ(chants)は、ただ歌うことが目的なのではなく英語の自然な発音、リズム、イントネーションを自然と習得することができ、それに伴う自然な語彙の習得も期待できる。

Song "My Favorite Color Is Yellow"(*Jazz Chants Old and New,* Carolyn Graham, Oxford University Press, 2002)

T：OK, everyone! Please come front and make a circle. No talking!
Pass the ball clockwise, and when we say "you", you point to the person who has the ball.
And sing the name to the melody. Right?
E：*My favorite color is yellow. My favorite number is two. My favorite flavor is chocolate, and my favorite person is you!* (ボールを持っている人を指差して)
Masa, Masa(ボールを持っている人の名前)　*My favorite person is you, is you!*
Is you, is you! My favorite person is you!　（イタリック部分がチャンツ）
(以下略)

という具合にやっていく方法もある。colorやnumberを変えたりすることもでき、ひとつのchantでも活動を工夫すれば使用頻度を増やすことができる。

・ＴＰＲ

ＴＰＲ(全身反応教授法)は、教師がcommandを言い、それを児童がactionによって理解したことを表現する方法である。児童にとって実際に目的があった言語認知ができる点と、実際に理解していることを児童が教師にfeed backできるという利点がある。またゲーム形式にすることにより、子供たちのモチベーションを上げることができる。

Game with ＴＰＲ

T：OK, make 2 groups and decide your turns in your group.
T：OK,1st person come to the front. *Bend your knees!*
S：（そのアクションをする）
T：OK,　Hiroshi is faster! Your group gets 1 point!
(以下略)

イタリックの箇所にいろいろなcommandsをいれていく。

以上が低学年で英語を音から定着させる方法例として挙げられる。

（２）高学年（４～６年生）の指導

高学年では、「言語習得的自我」が発達し、英語を他人の前で模倣することを恥ずかしがったりする子供が出てくる。しかし、分析能力が発達してくるため、語彙を増やして、functional

dialogsと組み合わせることにより、「英語が使える日本人」の育成の基盤ができる。また、文字を使い読み始めたり、書き始めたりすることもできてくる。

・Skit, Role Play

skitやrole playは文字と音が一致するようになった頃で、なおかつ言語習得的自我がまだ未発達である4年生前後を導入期とすると効果的であろう。skitにより、子供たちは左脳より右脳を使い英語を使用する。skitで使用する教材はstorytellingで読み聞かせしたものを使用すると児童にとって場面がイメージでき効果的である。

・Reading in English

低学年で既習した活動を、実際に文字を見て読んだり、書いてみたりすることで応用

例えばＴＰＲを利用したRead and Doの活動。
ハンドアウトを配布し、commandsを書いておく。

1. Draw a ☆ under this sentence.
2. Yell your name.
3. Give the teacher the OK sign.
(以下略)

教師がNumber 3. のように指示すると、生徒は3のcommandを読んで動作をする。これらのcommandsは、文を読まなければ（Read)、行動に移すことができない（Do）仕組みになっている。

・Writing in English

writingについては、フォニックスアルファベット[20]を導入したうえで、それをワードサーチ[21]やクロスワードパズルなどを使うことにより、音と文字のイメージの一致を図ることができる。また、free writingに近いことをさせるには、personal writingなど、topicが焦点化された状態のものからはじめるとよいだろう。

Personal writingの例

ハンドアウトにこのような絵を提示し、この人物を紹介するwritingをさせる。
"What's her name?" "Is she a golfer?"
"How old is she?" "Is she young or old?"
(以下略)

これらの質問をハンドアウトに載せ、writingの補助にする。

・Speaking in English

学習者は英語に十分さらされることができたら、今度はそれを模倣することが要求される。これも、低学年期のものを応用できる。

例えば、チャンツのところでやっていた "pass the ball" T：Ready. Here's the music. Pass the ball. (音楽がとまる) T：OK, Takuya tell me three things you can see in this kitchen.（ウォールチャートを用いて） S：A table... a chair... and... a window T：Good!, a table, a chair, and a window. (以下略) という風に簡単なものから言っていく。完璧な文にするには教師が生徒の発言をfeed backし、もう１回生徒に言わせてみる。

簡単なことが言えるようになってきたら今度はpersonal presentationなどtopicが焦点化された状態のものからはじめるとよいだろう。

Personal Presentationの例 T：OK, now start with your name and where you live. S：My name is Haruka. I live in Shibata. T：Good. Do you have any brothers or sisters? S：I have two sisters. T：Good. And what do you like? S：I like hamburgers and chocolate. T：OK, now tell us again. Put it all together... name, where you live, sisters, what you like, OK... S：My name is Haruka. I live in shibata. I have two sisters. T：And what do you like? S：I like hamburgers and chocolates. T：Very good!! という具合に生徒のpresentationを拡大するように補助していく。

これらは高学年の活動の例だが、こういった具合に分析能力などの高学年でのアドバンテージを生かした活動を導入していくとよいだろう。

V．結び

以上にわたり早期英語教育必要論を展開してきたことで、完全なる実現のためにはまださま

ざまな問題が存在していることが浮き彫りになったと思われる。

１つは教師側の問題である。英語に堪能な地域人材に委託するのか、現職の小学校教職員に任せるのか、中学校英語教員に委託するのか。まだはっきりとは決まっていない。いずれにせよ、小学校英語導入を中学校英語学習の前倒し段階ではなく、小学校で行う利点を把握し、それに見合った授業方法をとらなければ何の意味もなくなってしまう。やはりteacher trainingが不可欠であり、たとえ週１回の「国際理解教育」の一環でも、全国すべての小学校で早期英語教育のteacher trainingを受けた教師や英語に堪能な地域人材による早期英語教育が展開されるべきである。

もう１つは、早期英語教育の必要度の社会全般の認識の甘さである。前述にもあったとおり、まだ「英語」という「言語観」が日本では少ない。「教科」としての英語観でしか捉えられない人が多い。そして、日本語アイデンティティーを過剰防衛する意見が早期英語教育の反対理論として根強く残っている。小学生時代にしか訪れない貴重なスキル習得の利点に目をむけることができる人が増加すれば、もっとスムーズに早期英語教育の導入ができるかもしれない。

そして、最後に小学校英語導入の環境設定である。依然として、英語に接する機会が週１回にも満たない小学校は少なくはない。また、実践していたとしても全校生徒が一斉に体育館に集まり、"Hello"と挨拶を交わしたりするだけの小学校もある。小学校英語導入は以前にも述べたとおり、「総合的な学習の時間」の中の「国際理解教育」の一環であり、まだ行政の整備が行われていない状態である。苦言を述べると、行政は、予算をかけることを避けるために、各自治体、ひいては個々の小学校校長の判断に任せ、早期英語教育を丸投げするのではなく、早急に全国の小学校に対して実施できるよう環境面の改善が必要とされる。もちろん前述したとおり、教師の問題は現時点では小学校における英語授業の教員免許がないだけに、teacher trainingは不可欠であろう。

10年後、20年後、もっと先の未来になるのかわからないが、本論文で提起したような早期英語教育の実践が広がり、日本がグローバル化社会の先進国になっていることを夢見てこの論文を閉じたい。

註

(1) 文部科学省が2003年に打ち出した計画。裏を返せば文部科学省も「日本人は英語を使えない」と感じている。

(2) 平成14年度の学習指導要領の大きな改革ポイントとしては、「生きる力の育成」、「学校週５日制の開始」、「教育内容の厳選」、「総合的な学習の時間の開設」、「絶対評価の推進」が挙げられる。

(3)「総合的な学習の時間」とは、地域や学校、子どもたちに応じて、各学校が創意工夫を生かし、これまでの教科の枠を超えた学習ができる時間である。国際理解、環境、福祉、健康などについて、それを通して、子どもたちは自分で課題を見つけ、考え、判断し、問題を解決していく力を身につけ、問題の解決や問題をより深く探る活動に、意欲的・創造的に取り組み、そこから自分の生き方を考える力を育む。つまり、「生きる力」の育成をねらいとしている。

(4)「楽しく習う」という意味の造語で、「学習」という言葉と掛けている。

(5) 小学校における英語教育の導入において、文部科学省が考案したカリキュラム。

(6) 斉藤兆史（2003)、『日本人に１番合った英語学習方法』祥伝社、43〜46頁参照。

(7) アンケートにおいてあった意見。また「母国語の言語習得に影響がある」という反対論は、斉藤兆史

(2003)『日本人に1番合った英語学習方法』祥伝社、45頁参照。

(8) 鳥飼久美子・大津由紀雄（2002)『小学校でなぜ英語？――学校英語教育を考える――』岩波ブックレットの30頁「母語への影響」で「母語への影響があるとは思わない」と言い切っている。反対派の中でも、それは愚直な考えとして捉えているようだ。ただし、著書の中では、「英語教育の時間をほかの時間に充てることができるのでは？」と提案している。

(9) 母国語に対して自我を持ち、他の国の言語、文化に抵抗を示すこと。

(10) 久埜百合（2003)「特集：どうやって英語に入門させるか」(『月刊英語教育』4月号 8～10頁)、大修館、より引用。

(11) 佐藤学（1999)『教育改革をデザインする』岩波書店、76頁参照。また著者は、著書において、欧米と東アジア諸国の受験競争を比較し、東アジア諸国の受験競争は深刻であるとしている。

(12) Jane willis(2003), *Using English in the primary classroom*, By handout of British council in Tokyo. より引用。外山節子・筆者による共訳。

(13) Jane willis(2003), *Using English in the primary classroom*, By handout of British council in Tokyo. より引用。外山節子・筆者による共訳。

(14) 詳細は以下を参照。

1．言語能力
2．論理的ー数学的能力
3．空間的能力ー空間操作：メンタルイメージの形成、変形、使用
4．音楽能力：音の高低パターンの認識と創造
5．身体ー運動能力：筋肉の運動、調整能力
6．個人間能力：他者理解
7．個人内能力：自己理解、自我同一性意識の発達

Gardnerの7つの知能。認知心理学者Howard Gardnerによると、知能は能力の7つの異なる領域として同定でき、その価値は文化的に決定される、としている。

(15) Gregory Strong(2003), Educate for multiple intelligences, in *Daily Yomiuri*, p.14. June 17, 2003を参考。外山節子・筆者による共訳。

(16) Gregory Strong(2003), Educate for multiple intelligences, in *Daily Yomiuri*, p.14. June 17, 2003を参考。外山節子・筆者による共訳。

(17) 米山朝二（2002)『英語教育～実践から理論へ～』松柏社、208頁参照。

(18) 外山節子（1992)『英語おはなしたから箱』太洋社、1、2頁参照。

(19) 外山節子（1992)『英語おはなしたから箱』太洋社、27、29頁参照。

(20) A, B, C（エイ、ビー、スィー、）はアルファベットの名前で、A, B, C（ア、ブゥ、クゥ）といったアルファベットの音声学上の呼び方があるという1つの英語の文字と音を一致できる認識方法。ただし、絶対的な発音法則ではない。

(21) アルファベットが1文字ずつ並んでいて縦横ランダムに並んでいてそこから、並んでいる単語を探す活動。

参考文献

Mary Slattery & Jane willis (2001), *English for Primary Teachers*, Oxford University Press.

Carolyn Graham(2002), *Children's Jazz Chants ～old and new～*, Oxford University Press.

Gregory Strong(2003), Educate for multiple intelligences, in *Daily Yomiuri*, p.14, June 17, 2003.

Jane Willis(2003), Using English in the primary classroom, By handout of British council in Tokyo.
Krashen, S., Long, M & Scarcella,R.(1979), Age, rate, and eventual attainment in second language acquisition. *TESOL Quality*, 13: 573-582.
Larsen-Freeman, D. & Long, M. H. (1991), *An Introduction to Second Language Acquisition Research*, London: Longman.
Penfield, W. & Roberts, L. (1959), *Speech and Brain Mechanisms*, New York: Atheneum Press.
Curtain, H. & Pesola, C. (1994), *Language and Children: Making the Match.* (2nd ed.), New York: Longman.
Lennberg, E. (1967), *Biological Foundations of Language*, New York: John Wiley.
Guiora, A. Z., Brannon, R. C. & Dull, C. Y. (1972), Empathy and second language learning, *Language Learning* 22: 111-130.
D.krashen & D.Terrell (1983), *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*, Alemany Press.
鳥飼久美子・大津由紀雄（2002）『小学校でなぜ英語？――学校英語教育を考える――』岩波ブックレット。
斉藤兆史（2003）『日本人に１番合った英語学習方法』祥伝社。
文部科学省（2001）『小学校英語活動実践の手引』東京：開隆堂出版。
文部科学省（2003）『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』。
久埜百合（2003）「特集：どうやって英語に入門させるか」（『月刊英語教育』４月号８～10頁）、大修館。
佐藤学（1999）『教育改革をデザインする』岩波書店。
本名信行（2003）『世界の英語を歩く』集英社新書。
米山朝二（2002）『英語教育～実践から理論へ～』松柏社。
外山節子（1992）『英語おはなしたから箱』太洋社。
松川禮子（1997）『小学校に英語がやってきた！』アプリコット。
『えいごリアン』NHK学校放送。
『スーパーえいごリアン』NHK学校放送。
『おはなしえいごリアン』NHK学校放送。
http://plaza.across.or.jp/
http://www.ps.ritsumei.ac.jp/assoc/policy_science/103/10304.pdf

〈謝辞〉
本論文を書くにあたり、本学卒業論文担当教授松崎洋子先生に種々ご指導を賜りました。また、本学非常勤講師であり早期英語教育の第一人者でもある外山節子先生にも種々ご指導を賜りました。ここに記して厚く感謝の意を表します。

（卒業論文指導教員　松崎洋子・外山節子）

The Necessity of Teaching English in the Earliest Years of School Education

‹Abstract›

00E078 Masayuki Tsuno

This graduation thesis discusses the necessity of teaching English in the earliest years of school education.

Since April 2002, all public elementary schools started using a new "Course of Study" authorized by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, which allowed the implementation of English teaching as an option in the public school system in Japan to promote international understanding. This means it is time for teachers to gain knowledge about language acquisition and teaching method for children in order to motivate and interest them to learn English.

At present, for most junior high school students English is a mere school subject. They do not seem to look at English as a means of international communication. They learn English because it is a subject required for entrance examinations to high school.

My thesis includes three main parts: 1) the state of English education in Japan, 2) whether or not English education in the earliest school years should be required, and 3) the method for teaching English in the earliest school period. Presenting an analysis of questionnaires, theories of language acquisition, and samples of teaching methods, the paper points out that English education in elementary school has lots of advantages for makeing children become aware of English as a language for international communication.